Title	キリスト者とメンタルヘルス
Author(s)	平山，正実
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.14-1, 2004.8 : 13-16
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3885
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

キリスト者とメンタルヘルス

平山正実

私は、自治医科大学という、僻地に派遣する医者を育成する大学で、20年間、研究と教育と診療に励んできました。東京に来てからは、その後10年間、小さな診療所を設けて患者さんを診てきました。

私は教会に関係しているものですから、教会関

係者の方からの紹介が多くあります。牧師から紹介される場合もありますし、信徒、友人から紹介されるケースもあります。私の前に座る方は、一人としてハッピーな人生の人はいません。全部が全部、人生に行き詰まって、どうしようかという方ばかりです。今日は、私の臨床経験の中から感じたことを皆様とご一緒に考えてみたいと思います。

精神科というのは不思議な科で、本人が来るケースは割合少なく、ほとんどが配偶者や御両親がおいでになります。だから御本人から直接お話を聞く機会が少ないのです。

心の病というのは、現在もなお隠された病だと思います。イエス様は、悪霊が“生棲”する場所としてガリラヤを設定され、そこで病気の癒しをなさいました。ガリラヤというのは文字どおり辺境の地です。現代的な言葉でいえばマージナルな地域に属する私はそういうところで、心の病をみています。例えば心臓病や盲腸などの病気であれば、みんな大手を振って言います。しかし、心の病は教会の中ですら黙っている人が非常に多いのです。週報にも、だれだれさんがどこの病院に入院しました、お祈りくださいとは書きますが、精神病院に入院しましたとは書けない。そのようなことをするのはタブーのようになっています。

私は、以前いた教会で、牧師から、ちょっと精神的にぐあいが悪い人がいるから電話で状態を聞いてあげてくれないかと言われ電話をしたら、「何で電話をしてくるのか。おれは病気じゃない」と怒られたことがあります。

私は、クリスチャンホームといえば、美しいイメージを、ずっと若いときから描いてきました。ピューリタンの、清く正しく、美しく、神様を主とした平和な家族共同体というものを想像していました。つまり、子供も立派に育ち、夫婦も円満で何の問題もない。クリスチャンであれば万事家庭はうまくいくのだと教会でも教わりましたし、本を読めば、絵にかいたような、よいキリスト者の家庭像が書いてありますのでそのように思っていました。

しかし、本腰を入れて臨床を10年間やってみて感じたことは、現実はそんなに教科書通りにいかないなということでした。むしろ、クリスチャンだからこそこじれる例がたくさんあります。

聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターで、現在、私は、クリスチャンの家庭や教会の中で起こるいろいろな問題を研究するために、いろいろなケースを分析しています。ただ、プライバシーの問題もありますから、具体的なケースは絶対に明らかにはできません。しかし、その中から見えてきた共通点をここでお話したいと思います。何かの参考になれば幸いです。

1. キリスト者同士の夫婦

私が教会にいたときに、私を導いてくださった牧師は、クリスチャンと結婚しなさいと言われました。誰でもいいとは言いませんが、キリスト者であることが大前提だと。キリスト者なら価値観や人生観が一致しているから間違いないとの主張です。確かに旧約聖書を読むと、異教の人と結婚をして堕落したり、世俗化したという例がありますから、そのこと自身は間違いない、この主張の中には真理はあると思います。

しかし、それでは、だれでもいいからクリスチャン同士なら結婚すればいいかというと、それは問題なのではないかと思います。信徒同士であっても、お互いの性格的な面をもっと考える必要がある。たとえば、人格障害に悩んでいる人で救いを求めて教会に来ることが少なくありません。そういう人は、人間関係を作るのが難しい。こういう人の場合、クリスチャン同士結婚したからといって、必ずしもうまくいくとは限りません。

つまり、結婚するには無理な、性格的に未熟な人がいるということです。自己中心的で、他者に対して攻撃的で、相手の立場に立つことができない。そのような未熟性を備えた人は結婚には不向きです。そういう人々の人格的な事柄をどのように考えるか。これは非常に大きな問題だと思います。本来は、結婚するまでには人間として相手の人格を

認める、そういう成熟性が必要とされるにもかかわらず、そこまで成熟していない段階で結婚生活に入ってしまう。これは、教会教育や教会共同体の責任ではないか。どうやって相手が成熟へと至るか。そういうことが大きな問題であろうと思います。

結婚する前は黙っていたが、結婚後、配偶者に暴力を振るう、といったケースも結婚を難しくします。

夫婦間で、信仰生活はしていても、関心の対象が微妙にずれていてうまくいかないというケースがあります。一緒に教会には行くが、片方は家事や育児など、身の回りの生活に関心がある。片方は、芸術や文化などのスピリチュアルな問題に関心がある。相手は身の回りのことに関心があって、それを手伝ってくれと言う。しかし、自分は、手伝う時間があったら音楽を聞き本を読んでいるほうがいい。そのような場合、なかなか折り合いがつきません。

同じクリスチャンでも、そうした関心の違いが大きくなってくると、一緒に生活するのが窮屈になってきます。もちろん、大部分の方は折り合いをつけてやっているのですが、その差が大きい場合は苦痛になってくるわけです。

その他、一方はお金、家事、育児、仕事、旅行といった現世的な問題に関心があり、他方は教会重視、信仰重視で、教会のこと、伝道のことに全力を尽くす。そうすると、たまの日曜日ぐらいはどこかに行こうと言っても、「私は絶対に行かない、教会が第一だ」と主張し、意見が対立し、いつも波風が立ってしまうケースもあります。

時間の配分なども、価値観の違いによってズレが生じてきます。どこにエネルギーのポイントを置くのか、どこに焦点を置くのかによって、相手との心理的距離ができてきます。そういう微妙なずれが、だんだん大きなずれになってくる可能性があります。それを、だれがどういう形で調停するのか。そういうことが重要になってくるわけです。

そのまま放置しておくと、小さな傷がだんだん大きくなり、最後には口をきくのも嫌になってしまう。若いときは一瞬でもその人のそばにいたいという気持ちで結婚した人が、退職して両方が毎日顔をつき合わせると一緒にいたくない。そうなってしまうのです。同じ人でもどうして人間はそのように変わってしまうのでしょうか。考えてみれば不思議な話です。

そのずれ、破れをどのように修復するかということは、国家間でも社会でも夫婦の場合でも同じであって、ズレが大きくなると、相手にとって大きな重荷となります。

夫婦間で、知的能力、精神的能力、信仰の深さなどにあまりに大きな差がある場合、片方が相手に嫉妬する場合がある。そのようなコンプレックスをどのように調整していくのか。劣等感と優越感の問題をどう処遇していくか。これは大きな問題だと思います。

配偶者の一方が、心の病に罹患した場合も、結婚生活を難しくすることが多いことを付け加えておきます。

2. キリスト者の家庭の親子関係

夫婦間でけんかや争いが絶えない場合、子供が不安定になって、引きこもったり、無力化したりします。また、ある時期まで非常によい子のように振る舞っていても、悲しみを抑圧して、親の仲介を子供がやっているような場合、そういう不自然な形が思春期になって爆発して家庭内暴力に発展するケースもあります。

また、家族の中に精神障害や知的障害や奇形をもつ子供がいたり、がんで子供を亡くしたり、そうした不幸が起こった場合、夫婦で悲しみに対する受け止め方が違ってきて、離婚になるケースが非常に多くあります。お互いに裁き合って、相手に責任をなすりつける。女性のほうは、夫が仕事ばかりしてちっとも子供のことを顧みない、だからこうなったんだという。男性のほうは、おまえの育て方が悪いんだという。さらにひどいのは、おまえの家系にこんなのがいるからこんな子供ができたんだ

と責任をなすり合うようになってしまうのです。

アダムとエバの昔からそうですが、死や病を軸として人間の罪というものが顕在化して、相手を非難し合って、最終的に破綻してしまうケースが非常に多くあります。一般の家庭だけではなく、クリスチャンの家庭でも、不幸が起こると、そのような状態が起こってくる。こういうときこそまさに試練の時であり、我々は、どうすべきかということを真剣に神様に祈り、信頼できる人の助言をえて、その試練を乗り越えなければならないと思います。

3. キリスト者の家庭内における人間関係

キリスト者が構成する家庭であっても、危機をはらむ場面があります。これは何も現代だけではなく、旧約聖書を見ると、祭司エリの息子が泥棒をしたり、性的な逸脱行為をしたり、ダビデの息子が親に刃向かったりした、と書いてあります。これは人間の深い罪の姿です。決してきれいごとであってはいけない。そういう危機をはらむ場面があることを我々は覚悟しなければいけません。

その場合に私が考えるのは、片方または双方が義に過ぎるために問題を複雑にしてはいないかということです。知恵の主である「コヘレトの言葉」の中に「善人過ぎるな、賢過ぎるな。どうして滅びてよかろう」という言葉があります。問題を起こす我々が、みずからが善人であり、賢者であると思って自分の立場を固執し相手を裁く。クリスチャンの場合、聖書の言葉で相手を裁くわけです。裁かれるほうはたまったものではありません。つまり、自分が義なる者であると考えている、自分の考えを聖句をもちいて防御し相手を裁く、ここに葛藤の源泉があるのではないかと思います。

ヘブライ語の義という言葉を調べてみました。人間相互間の義には、たしかに正しいとか裁くという意味もありますが、愛する、救う、恵む、人格を保障するという意味もあります。

すなわち、義というものは裁くだけではない。相手のことを思いやる、相手に対して優しく扱うのも義である。自分の立場を神の位置に置くと、葛藤の悪循環に陥るのではないかという気がします。以上、短い時間ですが発題させていただきます。ありがとうございます。